

I タイトルページ

※10ptで42文字×36行
(デフォルトの設定より文字のサイズを10.5ptから10ptに変更して下さい)

上余白35mm
(デフォルトの設定)

里山の再生に関する考察 ← メインタイトルは14pt・MSゴシック

—カスミサンショウウオを中心に— ← サブタイトルは10pt・MSゴシック

仁文 知里 ← (一行空ける)

I はじめに ← 名前前は10pt・MS明朝

← (一行空ける)

← 章タイトルは10pt・MSゴシック

← (一行空ける)

すべてセンタリング(中央揃え)処理を行う

右余白30mm
(デフォルトの設定)

左余白30mm
(デフォルトの設定)

日本には1950年代まで人間が自然に働きかけ、自然から恵みを受けるという「里山」が各地に存在した。整備された棚田や農道、雑木林、そしてそのそばに佇む茅葺き屋根の民家という里山の風景は郷愁を誘う日本の古里を象徴する存在であるともいえる。里山には多様な生物が人間の存在を前提に生息しており、日本固有種や亜種も多く、日本人にとって馴染み深い生き物も多い。しかし1950年代以降古き良き里山は急速に破壊が進み、破壊を逃れて残った里山も分断され、放棄されるなどして荒廃してしまった。それに伴いたくさんの生物が個体数を減少させ、我々が親しんできたはずの生物でさえも絶滅危惧種に指定されるようになった。里山は生物多様性の宝庫だったのである。2002年に策定された新生物多様性国家戦略においても人為的に管理されてきた里山の自然の重要性が強調されるようになってきている。しかし里山の自然は人為的なものであるため、人間の開発から守るべき対象とされた原生的な自然に比べて保全について正しく理解されにくく、対策が遅れてきたのが現状である。そこで本論文ではその中でも特に個体数の減少が著しいカスミサンショウウオの保護の問題を通じて、里山が果たしている多面的機能と里山の自然環境と生態系を保全することの重要性を考察し、里山の再生に関係した法律の問題点の考察と法制度の活用の可能性という観点から里山の再生に向けた方策について検討していきたい。

↑本文は10pt・MS明朝

II 里山の持つ価値とその遷移

里山とは農林業活動などの人間の営みを通じて形成された人間と動物の共存地域のことで、雑木林や採草地、谷津田、集落、水田と河川、畑地などから構成される。里山の人々は伝統的農業生産と生活に必要な様々な資源を里山から手に入れることができた。農業のための肥料と水、家畜を養うための飼料、家屋を建て維持するための木材、茅、竹、燃料となる薪や松葉、日用品をつくる蔓や竹などを採取できるよう、多様な樹林や草原、田畑などを居住地のまわりに配置し、ため池などを利用しつつ自然を管理してきたのであり、自然の恵みを尽きることなく適切に利用した持続可能なシステムが構築されていたのである。原生林とは反対に、人の手を自然に加えることが里山の自然の維持には必要なのである。この点が原生林とは違い理解を得るのが困難であった原因であるといえる。

人の手が加わっていない原生林では陰樹や陰性植物など日光量が少なくても生育できる生物だ

※ページは入れない

下余白30mm
(デフォルトの設定)